Osaka Shoin Women's University Repository

山路の露注釈（五）

西木忠一
池田良子

凡例

一、本稿は『続群書類従』巻第五百十（物語十）『山路の露』を注釈したものである。

一、『続群書類従』本は全編区切らず書き続けてあるが、内容上から適宜段に分け、各段ごとに見出しを付した。

一、本注釈は、本文・通釈・語釈・補記の四項より成る。

一、本文は読解の便宜を考え、適宜次のような工夫を加えた。

(1) 仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

(2) 時には仮名書きの語を漢字に、漢字書きを仮名に改めた。

かほる→薫　せうと→兄人

猶　→なほ　其比→そのころ

(3) 句読点を付し、送り仮名を補った。

(4) 反復記号はもとの文字にもどした。

中々→なかなか

(5) 会話や消息の部分は「　」で示した。

一、甚しい本文異同のある場合は補記の項で触れた。なお、その項における「第一類本」(主として「刊本系」)「第二類本」(主として「写本系」)の呼称は、本位田重美氏(『源氏物語外篇　山路の露　第一類本第二類本』)の呼称を踏襲したものである。

一、補記の項で明示した諸作品の本文は、『新潮日本古典集成』によった。ただし、上記以外の場合はその都度出典を明記した。

十四　山　道

暮れぬれば、いみじう忍びやつしたる女車のさまにて、おはすべし。山道になりてぞ、御馬には乗り移り給ひける。夕霧たちこめて、道いとたどたどしけれども、深き心をしるべにて、急ぎわたり給ふ

Osaka Shoin Women's University Repository

もかつはあやしく、いまはその甲斐あるまじきをとおぼせども、ありし世の夢語りをだに語り合はせまほしう、行くさき急がるる御心地になん。浮雲はらふ四方の嵐に、月名残りなう澄みのぼりて、千里のほかまで思ひやらるる心地するに、いとどおぼし残すことあらじかし。山深くなるままに、道いとしげう露深ければ、御随身いとやつしたれど、さすがにつきづきしく、御前駆の露はらふさまもをかしく見ゆ。

〔通釈〕

日が暮れたので、（薫は）大層人目を忍んで目につかぬようにした女車のように装って、おいでになるようである。山道になって、そこで御馬に乗り変えなさった。あたりは夕霧がたちこめていて、道はひどくたどたどしいけれども、（浮舟を思う）深い心を道しるべにして、急いでお行きになるのも、一方では不思議であり、（浮舟が尼となってしまった）今となってはどんなに急いでみたとて甲斐のないことだとお思いなさるものの、過ぎ去ったあのころの夢語りを、せめて（浮舟と）語り合いたいものだと（思われるにつけても）、ますます行く先を急ぎたく思われる御気持であった。浮雲を吹き払ってしまう四方の嵐に、折から月が見事に澄んで東の空にのぼっていて、千里も離れた遠くまでも思いやる心地がするので、（薫は）思いの限りをお尽しなさるに相違ない。山がだんだん深くなって行くにつれて、道はますますけわしくなり木々の繁みに落く露も深いので、御随身はひどく目立たないように装っているけれども、却ってこの場に相応しく、御前駆が露を払う様子もなかなか趣深く見える。

〔語釈〕

○女車――女性が外出する折に乗る牛車で、簾の下から下簾の裾を垂らした。「今一人が云はく、『下簾を垂れて女車の様にて見むは何に』と」。（『今昔物語集』巻第二十八・「頼定の郎等共、紫野に物見たる語」）

○行くさき急がるる御心地――急いでみても甲斐がないと思う一方で、思わず急ぎたくなってしまう薫の御気持。「るる」は自発を表わす。

○四方の嵐――あたりを吹きわたる嵐。「ひとり目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくるここちして」（源氏・須磨）

○前駆――貴人の外出の折に、前払いをするもの。『源氏物語』には「かしこには、過ぎたまひぬるけはひを、遠くなるまで聞こゆる前駆の声々、ただならずおぼえたまふ。」（総角）・「横川に通ふ道のたよりに寄せて、中将ここにおはしたり。前駆うち追ひて、あてやかなる男の入り来るを見出だして……」（手習）と「前駆」が二例、「めざましと思ひて、随身は参りぬ。御前駆の松明ほのかにて、いと忍びて出でたまふ。」（夕顔）・「十七日の月さし出でて、河原のほど、御前駆の火もほのかなるに、鳥部野の方など見やりたるほどなど、……」（夕顔）など「御前駆」の用例が九例見える。なお、「御車さし出でて、御前など参り集るほど、をり知り顔なる時雨うちそそきて」（葵）・「御前ことこと

Osaka Shoin Women's University Repository

しからで、親しき限り五六人ばかり、狩衣にてさぶらふ。」（夕霧）などのごとく、「御前」ともいう。

〔補記〕

①「さすがにつきづきしく御前駆の露はらふさまもをかしく見ゆ」の傍線部ａｂ、第二類本は次のごとくである。

ａ＝ナシ

ｂ＝うちはらひ入たてまつるもいとおかし

②「夕霧たちこめて、道いとたどたどしけれども、深き心をしるべにて……」について。本位田氏は右の「深き心をしるべにて」と、『建礼門院右京大夫集』の右京大夫が大原にこもる女院を問う箇所の

女院、大原におはしますとばかりは聞きまゐらすれど、さるべき人に知られでは、まゐるべきやうもなかりしを、深き心をしるべにて、わりなくてたづねまゐるに、やうやう近づくままに、山道の気色よりまづ涙は先立ちていふかたなきに、御いほりのさま、御すまひ、ことがら、すべて目もあてられず。

の「深き心をしるべにて」とが、「共通点は『深き心をしるべにて』の一句だけであるが、彼女もこの同じ山道を辿っていった経験を持っているだけ、見逃しがたいことばである」（『源氏物語外篇　山路の露第一類本第二類本』二〇九頁）と、注意を促された。右京大夫を『山路の露』の作者に想定する場合、とりわけ耳を傾けるべきご指摘であろう。

なお、池田亀鑑校註「古本山路の露」（日本古典全書『源氏物語七』）に注記するごとく、『万葉集』巻四・七〇九の

豊前国娘子大宅女歌一首末レ審二姓氏

夕闇者　路多豆多頭四　待レ月而　行吾背子　其間尓母将レ見

豊前の国の娘子大宅女が歌一首

夕闇は　道たづたづし　月待ちて　行ませ我が背子　その間にも見む

を踏まえた描写である。

③「千里のほかまで思ひやらるる心地するに」について。

『白氏文集』巻第十四律詩

八月十五日夜、禁中獨直、

對レ月憶二元九一

銀臺金闕夕沈沈　獨宿相思在二翰林一

三五夜中新月色　二千里外故人心

渚宮東面煙波冷　浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不二同見一　江陵卑濕足二秋陰一

八月十五日夜、禁中に獨り直し、月に對して元九を憶ふ

銀臺金闕　夕に沈沈たり、

獨宿　相思うて　翰林に在り。

三五夜中　新月の色、

Osaka Shoin Women's University Repository

二千里外　故人の心。
渚宮の東面　煙波冷かに、
浴殿の西頭　鐘漏深し。
猶ほ恐る　清光同じく見ざるを、
江陵は卑濕にして　秋陰足る。

（新釈漢文大系99『白民文集』三・岡林繁著・明治書院）

の四句目をもとに語っている。

④「御前駆の露はらふさま……」について。

『源氏物語』蓬生の巻に、惟光が光源氏を末摘花の邸に案内する条があるが、そこにも、

ゆゑある御消息もいと聞こえまほしけれど、見たまひしほどの口遅さもまだ変らずは、御使の立ちわづらはむもいとほしう、おぼしとどめつ。惟光も、「さらにえ分けさせたまふまじき蓬の露けさになむはべる。露すこし払はせてなむ、入らせたまふべき」と聞こゆれば、

尋ねてもわれこそとはめ道もなく
深き蓬のもとの心を

とひとりごちて、なほ下りたまへば、御さきの露を、馬の鞭して払ひつつ入れたてまつる。

と見えた。『源氏物語絵巻』（蓬生・徳川黎明会蔵）にもこの場は描かれていて、秋の蓬生におおわれた邸が茶系統の色彩でまとめられている。浮舟が身を寄せている小野を考える場合の、一つの目安にはなるであろう。

⑤「今宵忍びてものせん」（十三、青鈍参照）と考えた薫は、「女車のさま」にして小野に向かう。都を出る時は人目を避けるために心していたからであった。

今更急いでみたとて甲斐もないと思いつつも、その一方ではやはり心がはやる。過ぎし日の思い出を、彼女（浮舟）と分かちあいたいというのである。

折から「月名残なう澄みのぼ」る。薫の心は、あたかも遠くに去って行った友人元九を憶う、白居易の心に通じている。

道は進むにつれてけわしさを増す。木々の葉に置く露を払う前駆の様子も、なかなか風情がある。

いま、小野の秋は一段と深まっている。秋の夜の小野。それは都の貴族達の心を捕えてはなさない。

このような本段の場面設定を見ると、やはり女性作者の作品であるとすることを、認めざるを得ないであろう。

十五　額髪

かしこは山の麓にいとささやかなる所なりけり。まづ、かの童を入れて、案内見給へば、「こなたの門だつかたは鎖して侍るめり。竹の垣をしわたしたる所に、通ふ道の侍るめり。ただ入らせ給へ。人かげもし侍らず」と聞こゆれば、「しばし音なくてを」とのたまひて、われひとり入り給ふ。小柴といふものはかなくしなしたるも、同じことなれど、いつなつかしくよしあるさまなり。妻戸もあ

Osaka Shoin Women's University Repository

きて、いまだ人の起きたるにやと見ゆれば、しげりたる前栽のもとより伝ひよりて、軒近き常磐木の所狭くひろごりたる下に、立ちかくれて見給へば、こなたは仏の御前なるべし、名香の香いとしみ深くかをり出でて、ただこの端つ方におこなふ人あるにや、経の巻きかへさるる音も、しのびやかになつかしく聞こえてしめじめとものあはれなるに、なにとなくやがて御涙すすむ心地して、つくづくと見ゐたまへるに、とばかりありて、おこなひ果てぬるにや、「いみじの月の光や」とひとりごちて、簾のつま少しあげつつ、月の顔をつくづくと眺めたるかたはら目、昔ながらのおもかげふとおぼし出でられて、いみじうあはれなるに見給へば、月は残りなくさし入りたるに、鈍色・香染などにや、袖口なつかしう見えて、額髪のゆらゆらとそぎかけられたる、まみのわたりいみじうなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて、忍びがたうまもりゐ給へるに、なほとばかり眺め入りて、

里分かぬ雲居の月のかげのみや見し世の秋にかはらざるらん

としのびやかにひとりごちて、涙ぐみたるさま、いみじうあはれなるに、まめ人もさのみはえしづめ給はずやありけん

ふる里の月は涙にかきくれてその夜ながらのかげは見ざりき

とてふと寄り給へるに、いとおぼえなく、ばけものなどいふらんものにこそとむくつけくて、おくざまに引き入り給ふ袖を引き寄せ給ふままに、せきとめがたき御けしきを、さすがそれと見知られ給ふは、いとはづかしう口惜しくおぼえつつ、ひたすらむくつけきものならばいかがはせん、世にあるものとも聞かれ奉りぬるをこそは、憂きことに思ひつつ、いかであらざりけりと聞きなほされたてまつらんと、とざまかうざまにあらまされつるを、のがれがたく見あらはされ奉りぬると、せんかたなくて、涙のみ流れ出でつつ、われにもあらぬさまいとあはれなり。

〔通釈〕

小野は比叡山の麓にある、ひどく小じんまりとした所であった。まず、あの童（小君）を遣って案内を乞わせたところ、（小君は）「こちらの門らしいところは閉じてあるようです。竹の垣をずっとしわたしてある所に、通う道があるようです。さっそくお入りください ませ。あたりに人影も見えません」と申し上げると、（薫は）「しばらくの間、静かにしているように」とおっしゃって、ご自分一人お入りなさる。（こうした庵に）小柴というものをかりそめにしわたしてあるのは、いずれも同じことではあるけれども、この上もなく親しみ深く風情がある様子である。妻戸も開いていて、いまも人が起きているのであろうかと思って見ると、繁った前栽の木のもとから伝い寄って、軒近くに立っている常磐木の枝があたり一面に繁りわたっているその下に、（薫は）立ちかくれてごらんになると、どうやらこちらは仏の御前のようであるらしい、名香の香がひどく深く香って来て、つい目前の端でおつとめする人がいるのであろうか、お経の巻物を巻きかえす音も、そっと親しみ深く聞こえてしんみりと心にしみて来るので、（薫は）特にこれということもなくそのまま御涙があふれる思いがして、もの思いに沈んでごらんになっていると、しばらくしておつとめも終わったのであろうか、（浮舟が）「き

Osaka Shoin Women's University Repository

れいな月の光だこと」とつぶやいて、簾のはしを少し巻き上げては、月をじっと眺めている横顔は、昔のままのおもかげがふと思い出されて、この上もなく趣深いのを（薫が）ごらんになると、月は残るところなくさし込んだ部屋に、鈍色・香染などの衣装であろうか、袖口が親しみ深く見えており、額髪が削がれてゆらゆらとゆれている、その目元の様子はなかなか美しく情趣があって、このような尼姿である時が却ってかわいさが増して、（薫は）たえがたくじっとごらんになっていると、（浮舟は）やはりもうしばらく眺め入って

里分かぬ雲居の月のかげのみや見し世の秋にかはらざるらん

とこっそりつぶやいて涙ぐんでいる有様は、なかなか趣があるので、まめ人の薫もそんなに心を静めることが出来なかったことであろうか、（薫は）

ふる里の月は涙にかきくれてその夜ながらのかげは見ざりき

と詠じて、ふと近寄られると、（浮舟は）思いがけぬことであり、化物などというものだろうと思うと不気味になり、奥の方へお入りになろうとするその袖を、（薫が）わが方に引き寄せなさるにつけても、こらえきれない（薫の）様子を（見ると、浮舟は）さすがに自分だと相手に見知られてしまうのは、ひどく恥しくも口惜しくも思って、一途に気味の悪いものであったらどうしよう、また、この世に生きているのだとも（薫に）聞かれてしまったことこそは、つらいことだと思って、なんとかして自分はもうこの世に生きてはいないのだとお聞きなおしいただきたいものだと、あれこれ思いめぐらされるのに、（今更）逃げようもなくこうして見あらわされてしまったことだと（思うにつけて）いたし方なくて、（浮舟は）涙だけが次々と流れ落ちて、彼女のわれにもあらぬ様子はひどくあわれである。

〔語釈〕

○かしこ――浮舟が隠棲して暮らす「小野」。

○山の麓――「山」は比叡。比叡の山麓。

○小柴――「小柴垣」の略。「ただこのつづらをりの下に、同じ小柴なれど、うるはしうしわたして」（源氏・若紫）。

○妻戸――両開きの板戸で、「一般に寝殿、対の廂から簀子に出るところ、殿舎の東西両側面の南と北に一箇所ずつ、計四箇所にこの戸を設けた出入口がある」（池田亀鑑編『源氏物語事典　上巻』東京堂出版・三三五頁）。「東の妻戸に立てたてまつりて、われは南の隅の間より、格子たたきののしりて入りぬ。」（源氏・空蟬）。

○常磐木――年中その葉の色の変わらぬ樹木。常緑樹。

○名香――仏前にたく香。「風はげしう吹きふぶきて、御簾のうちの匂ひ、いとものの深き黒方にしみて、名香の煙もほのかなり。」（源氏・賢木）。他に『源氏物語』に四例あり。

○香染――丁子（ちゃうじ。南方原産の常緑喬木）の煮汁で染めたもので、色は黄味がかった紅色。仏事に用いる扇・衣服・袈裟などを染めた。

○額髪――女性の額または鬢から頬のあたりまで、長く垂れる髪。「みづから額髪をかきさぐりて、あへなく心細ければ、うちひそみぬかし。」（源氏・帚木）

Osaka Shoin Women's University Repository

○まみのわたり――「まみ」は目つき・目もとの意。「いみじうものをあはれとおぼして、所々(ところどころ)うち赤みたまへる御まみのわたりなど、言はむかたなく見えたまふ。」(源氏・明石)

○「里分かぬ」の歌――浮舟の独詠歌。歌意は「里を区別しないで照り渡っている月の光だけは、その昔見た折の秋に少しも変わっていないことだ」であって、すべてのものはみながらりと一変してしまったのに、月の光のみは昔のままであることだと、以前のままの月の光の前で、とりわけわが身の変化をしみじみと思う浮舟である。四句目の「見し世」は『日本古典全書』が「宇治在住当時を指すか」(源氏物語・二六三頁)と注記するが、それに従ってよい。

○まめ人――真面目な人。ここでは「薫」をいう。

○「ふる里の」の歌――まめ人「薫」の歌。「ふる里の月は涙にくもってしまい、あの夜のままの月の光を見ることはありませんでした」の意。初句の「ふる里」は宇治のこと。

○むくつけくて――形容詞「むくつけし」は不気味であること、うす気味の悪いことをいう。つまり、そのものの正体がわからない時に感ずる不快感を表わす語である。

〔補記〕

①本段には次の箇所に本文異同が見える。

(1)「しげりたる前栽のもとより伝ひよりて、軒近き常磐木の所狭くひろごりたる下に、立ちかくれて見給へば」の傍線部a～e、第二類本は次のごとくである。

a＝しげりあひたる　b＝に
c＝つたひより　d＝なし
e＝萩のひろごりたる

(2)「名香の香いとしみ深くかをり出でて、ただこの端つ方に」の傍線部a b、第二類本次のごとくである。

a＝めうかうの香しみふかく
b＝たゝちかきなるへし。此のはしつかた

(3)「いみじうあはれなるに見給へば月は残りなく」の傍線部、第二類本なし。

(4)「まみのわたりなまめかしうをかしげにて、かかるしもこそらうたげさまさりて」の傍線部a b c、第二類本は次のごとくである。

a＝なし　b＝なし
c＝らうたかりけれと

(5)「としのびやかにひとりごちて」の傍線本、第二類本なし。

(6)「ふる里の月は涙にかきくれてその夜ながらのかげは見ざりき」の傍線部、第二類本では「かげもなかりき」とある。

(7)「いとはづかしう口惜しくおぼえつつ」の傍線部、第二類本なし。

(8)「いかであらざりけりと聞きなほされたてまつらんと、とざまかうざまにあらまされつるを」の傍線部a b c、第二類本は次のごとくである。

a＝けると

Osaka Shoin Women's University Repository

b＝なを知れたてまつらん
c＝あらはささりつるを

(9)「見あらはされ奉りぬると、せんかたなくて、涙のみ流れ出でつつ、われにもあらぬさまいとあはれなり」の傍線部ａｂｃ、第二類本は次のごとくである。

a＝こそ
b＝せむかたなふはつかしく口惜うて
c＝哀け也

池田亀鑑校註「古本山路の露」（日本古典全書『源氏物語七』）では、傍線部ｃ、「あらまされつるおのれを」となっている。

②「経の巻きかへさるる音」について。

本位田重美氏は、

「経」というような非情物が受身の主語となることは、日本語としては異例の表現である。

とし、それは作者が

「経をまきかへす音」とすると、経をよんでいる人物のイメージが強く出すぎ、かすかな音に耳を澄ましている気持が出ないと考えたのであろう。（『源氏物語外篇　山路の露』一五九頁）

と、異例な表現を採った理由を推測されている。

③土岐武治氏は『狭衣物語の研究』（七六〇～七七〇頁）において、『山路の露』において薫が「小君を案内に伴って、小野の里を訪ねて浮舟に再会し、懐旧の情に堪へず、遂に浮舟の袖を捉へてしまう場面」（七六二頁）と、『狭衣物語』巻四末尾の、狭衣帝が「中秋の一日嵯峨野へ、法皇の御悩みの見舞に行幸し、その帰途持仏堂に立寄つて、入道宮へ対面すれば、懐旧の情に堪へきれず、遂に宮の袖を捉らへて引き寄せるといふ場面」（七六〇頁）との、手法「文辞」における類似を指摘されたが、ここでは本段の関係部分のみに限定し、

山路の露＝Ⓐ　狭衣物語＝Ⓑ

として、いささか示すことにする（ただし、引用本文は土岐氏のままとする）。

(1)
Ⓐこなたは仏の御前近きなるべし。名香ふかく、しみ深く薫り出でて、たゞ近きなるべし。
Ⓑやがておはしまし所近かければ、……さにやと覚ゆる御匂ひのうち薫りたるも、……

(2)
Ⓐ奥へひき入り給ふに、袖を引き寄せ給ふまゝに、せきとめがたき御けしき……
Ⓑ御簾の内に、半らは入らせ給ひて、御衣の褄を引き寄せ……いと所狭きも

など、その他にも土岐氏の指摘が見える（詳細は同氏の『狭衣物語の研究』を参照されたい）。

④「ばけもの」について。

「ばけもの」の用例は、平安朝文学に全く見られない。また、『保元物語』『平治物語』『平家物語』『曽我物語』の中世軍記物語にも、『方丈記』にも見えない。

ところが、『今昔物語集』にも見えなかった「ばけもの」が『古

Osaka Shoin Women's University Repository

今著聞集』には、

(1)ばけもののしわざにこそ。（巻十七「二条院の御時、南殿に変化の事」）

(2)かの御所にばけものあるよし聞えければ、……（同「庄田頼度、八条殿の変化を捕縛する事」）

(3)「件のばけもの見あらはして参れ」とおほせられて、……（同「同」）

(4)そののちは、かの御所にばけものなかりけり。（同「同」）

(5)そののちは、ばけ物ながくなくなりぬ。（同「大納言泰通、狐狩を催さんとするに、老狐夢枕に立つ事」）

の五例が見え、また、『とはずがたり』（巻三）には、

……筒井の御所の前なる御簾の中より、袖をひかゆる人あり。まめやかに化物の心地して、荒らかに、「あな悲し」と言ふ。

の一例、『徒然草』（二三〇段）に、

五条内裏には、妖物ありけり。藤大納言殿語られ侍りしは、……

の一例、『源平盛衰記』（巻第十七「祇王・祇女・仏前の事」）に、

……、「誰人ぞ。いぶせき夜の空、あやしの草の戸に尋ね来べき人なし。恐しや。天狗・化物などにや」と言ひければ、……（水原一考定『新定源平盛衰記』第二巻）

の一例が見え、『太平記』（巻四「大森彦七が事」）にも、

……、後にさがりたる者ども、太刀・長刀の鞘をはづし、走り寄ってこれを見れば、化物はかき消すやうに失せにけり。

の一例が見える。なお、『宇治拾遺物語』（一五八）の標題に、

陽成院、妖物の事

とある。

こうした用例を見ると、「ばけもの」はおよそ平安朝文学に縁遠い語であったことがわかる。

因みに、「ばく」（動詞下二段活用）の用例を見ると、『宇津保物語』（国ゆづりの下）に、

（中宮）―そのあしきだにも、宮とても、妻婚き狂ひをこそし給へ、いと憎げにはおはせず。おほかたあまがつ女なれば、おもては化けたるにこそあらめ。……」（原田芳起校注『宇津保物語』下巻・角川文庫）

の一例のみが平安朝文学に見える。他には『古今著聞集』（巻十七）に

(1)あひつぎてすまれけるほどに、狐おほく、つねにばけけり。（「大納言泰通、狐狩を催さんと、……」）

(2)……、年をへてますますにばけけるほどに、大納言いかり給ひて、（「同」）

の二例、『徒然草』（二三〇段）に

未練の狐、ばけ損じけるにこそ。

の一例が見える。

『宇津保物語』に「ばく」（動詞）が一例ながらも見えることは、当時いささかではあるが「ばく」が使用されはじめていたことを示していて、「ばく」の連用形「ばけ」＋「もの」との一語が形

Osaka Shoin Women's University Repository

成されるのは、次の中世を待たねばならなかったといえよう。

『源氏物語』「夢の浮橋」の巻に続く「山路の露」を創作するに際して、作者は不用意にも、王朝貴族社会ではいまだ一語として形成されていなかった語を、使用してしまったということになる。

「山路の露」の作者に女性を考えることは決して誤っていないであろう。だが、女性作者の作品に「ばけもの」が見えるのは、既に提示した『とはずがたり』と、『弁内侍日記』の「宝治三年二月一日」の条に、

……、夜の御殿の一間に、「やや」と言ふ人あり。化物(ばけもの)にやと恐ろしながら、行きて見れば、何やらんの三御衣(みつおんぞ)……(『新編日本古典文学全集　中世日記紀行集』)

があるのみで、勿論（本位田重美氏は「山路の露」の作者に「建礼門院右京大夫」を想定されたが）『建礼門院右京大夫集』にも見えない。

「ばけもの」は、平安王朝文学には見えず、中世に入って説話文学に見えはじめるのは、当時の庶民の世界では既に使用されていたことを示すものと考えられ、女性作者には（中世とはいえ）まだ馴染みの薄い語であったといえる。

⑤本段は全四文にて構成されている。それぞれの文頭を示すと、

①かしこは山の麓に……

②まづ、かの童を入れて……

③小柴といふものを……

④妻戸もあきて……

となっていて、④は①②③の約六倍にも相当する長文であり、浮舟と薫の歌をも語る、なかなかの名文である。特に④に漂う情趣は十分に表現し尽されているといえよう。人影の見えない小野の庵にひっそりと生きている浮舟と、彼女の袖をとらえる薫の止むに止まれぬ思いが、しみじみと語られていて、読者に直に伝わって来る。この点からも、やはり作者に「女性」を想定することは誤りでないといえる。

（付）補記④「ばけもの」の稿を成すに際し、本学の西端幸雄教授の御教示を賜わった。記して謝意を表すものである。